

本土（ヤマト）から運ばれた歌

——奄美・徳之島の〈紡績歌〉とその背景

酒 井 正 子

1. はじめに一民俗音楽文化を構成する〈紡績歌〉というジャンル

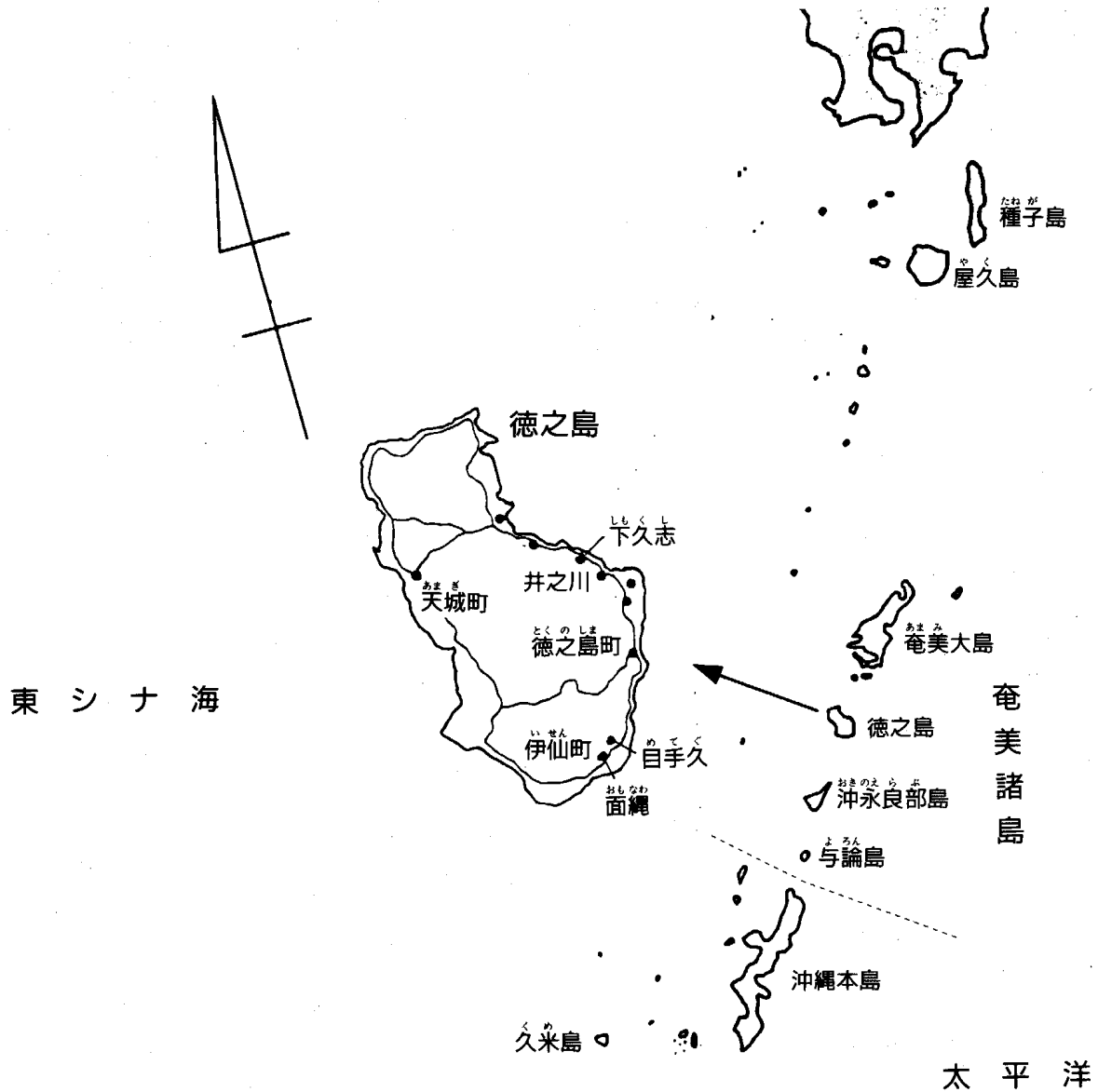
大島郡伊仙町目手久で〈紡績歌〉というジャンルの歌が歌われていることを知ったのは、ある「歌あそび」の席上である。このあたりは「歌あそび」の盛んな土地柄で、祭りや祝いの時以外にも日常的に行われている。夜のつれづれを紛らすため気心の知れた人たちが集まり、三味線につけて歌を出し合い語らってあそぶのである。このような機会をナグサミ（慰め）ともいい、戦前は夏の夜、冬の製糖小屋、娘たちの夜なべ仕事の側などで盛んに行われた。

近年も稀になったとはいえこうした習慣はある。'92年夏、一年ぶりに訪ねて行った私の宿に近所の人や歌好きの仲間が来て下さり、久しぶりだねと言いつつ歌あそびになった。

目手久での歌あそびのレパートリーは次のようなものである。

(1) シマ唄

「シマ朝花」「^{あさばな}一^{ちゅっきゃ}切り^{ぶし}節」「三京^{くし}ぬ^{とう}後」「取^{かね}たん金ぐわ」「正月歌」「まんかい玉」「ドンドン節」など、集落（シマ）の方言・節まわしで歌われる、徳之島の伝統歌謡。口頭伝承を基本とし、三味線や太鼓につけてかわるがわる歌詞を掛け合ってあそぶ。大島の島歌である「大島朝花」「くるだんど」「行きゅんにゃ加那」などもよく歌われる。



(奄美諸島は鹿児島県に属し、徳之島は人口約3.4万)

(2) ナハ唄 (沖縄民謡)

「口説」のほか、「アサドヤユンタ」「海のちんぼら」「かまやしの節」など、リズムミッ的な沖縄の民謡も好まれる。

(3) 本土の民謡や大正・昭和 (戦前) のはやり歌

「小原節」「草津節」「イソ節」「ラッパ節」など。またラジオ・レコードの普及とともに全国に流布した「かごの鳥」や「銀座の柳」「馬車はゆくゆく」といった流行歌も歌われている。

(4) 新民謡

「徳之島小唄」「ワイド節」「奄美小唄」「島育ち」「永良部百合の花」などの創作歌謡。多くは共通語の歌詞がつけられている。

歌あそびでは、通常(1)のシマ唄からはじめて、座がくつろいでくると他のジャンルも次々に出される。(3)のような本土の歌も重要なレパートリーである。主に昭和10年代までの生まれの人が青春を送った時期に憶えた歌が中心で、シマ歌の歌掛け方式にならって憶えている歌詞を掛け合い、次第にテンポを早めたりしてあそぶ。個々のメンバーの中では、これらのジャンルが幾層にも重なり、レパートリーが形成されているのである。

その夜もそうした歌の合間に、一人が〈紡績歌〉を口ずさんだ。たちまち他も唱和し、次章であげる幾つかの曲を、記憶をたどりながら再現した。演唱者の二人は各々昭和元年と8年の生まれで、自身は本土の紡績工場に勤務した体験はない。しかし子供の頃〈紡績歌〉をよく歌っていた。田植えの時に、隣でおばあさんたちが田を植えながら「ず——っとこればかり」歌っていたので憶えた。「高い声で、面白かったよ」という。このおばあさん達は明治20年代生まれの田植歌の名人で、農作業の単調さを紛らすために、あそび歌の数々を次々と口ずさまれたのであろう。その中で〈紡績歌〉が大きな比重を占めていたわけで、実際紡績に行った方達も多く含まれていたことと思われる。

これらの一連の〈紡績歌〉は、徳之島のほか、奄美大島、沖永良部島等にもみられる。主として明治—大正初期生まれの大量の本土への紡績女工の出稼ぎ者が、島へもちかえり、口承で歌い伝えたものである。時期的には大正から昭和初期で、工場内では全国から集まった女工達が辛い境遇を歌い、慰めとした。奄美の場合、結婚前の1—3年間勤めに出る人が多く、若く生々しい記憶を直接シマに持ち帰って歌ったのだと思われる。

それらの曲は、いまみてきたように、歌あそびや仕事のなぐさめで歌う最もポピュラーな「あそび歌」のジャンルの中に吸収されていった。その他、後にみる^{うえおもなわ}上面縄集落での「しょんまいか」のように、集落共同体の集団の踊り歌として八月踊り風に取り入れられたものもある。また女性シャーマンであるユタの神歌旋律として、死者の霊を降ろしてくる重要な局面で用いる例もある。〈紡

績歌〉は奄美社会の深層に根を下ろしていると考えられる。社会現象・事件を扱った歌のテーマとしては、太平洋戦争と並んで多く、歌と共に紡績での体験、本土での異文化接触などが語り伝えられてきた面も見逃せない。南西諸島の住民の本土体験を考える上で、また、奄美の歌文化のダイナミズムを考える上で示唆に富むテーマであろう。ここでは、歌や語りをもとに〈紡績歌〉の存在を指摘し、その事例を報告する。また紡績体験やその背景に関する資料も、とりあえず知りえた範囲で示しておきたい。なおこれまで奄美における〈紡績歌〉のまとまった報告はなく、『女工哀史』（細井'54）にも同一例は見いだされないことを申し添えておく。

2. 〈紡績歌〉の諸相

(1) あそび歌、はやり歌として

以下曲名、歌詞の聞き取りに続き、歌とともに語られたコメントを*で記す。さらに酒井による注、楽譜、若干の考察も添える。収録は主に'92年—'94年にかけて、伊仙町目手久を中心に、伊仙町上面縄、徳之島町下久志、大阪市此花区高見、大阪府岸和田市春木などで行った。演唱者の生年をM=明治、T=大正、S=昭和で、また収録年月日も可能な限り記した。なお採譜、校閲、清書は川島千恵子氏のご協力を得た。¹⁾

一。「静岡めいしょの歌」

(目手久 S1, S8 '92.8.21

以下同じ)

- ① くにをでるとき笑い顔
 汽車や汽船にのせられて
 静岡めいしょにおろされて *1
- ② 静岡めいしょに来てみれば
 ぐるりは高がきガラス窓
 出るに出られぬ籠の鳥

比較例 (下久志 M39 '93.8.17)

—以下目手久と異なる箇所のみ記す—

- ③ 朝は6時晩6時
12時間のその間
3度の食事もいそいそと *2
- ④ あやまち仕事があるならば
見回りさんに叱られて *3
こんなに工場が厳しいなら
- ⑤ 寄宿へ帰って思案する
短きこの世の苦勞より
長きあの世の極樂へ
- ⑥ そうだそうだとただ一人
人の寝過ごす一時ごろ
棚のこうりを引き下ろし
- ⑦ 上から下へと衣装替え
着物は白もん黒もんで
帯ははやりの丸帯で
- ⑧ さしてゆくのは淀川へ
淀の川へとついた時
たもとに小石を拾い込み *4
- ⑨ 西に向かって手を合わし
東に向かって手を合わし
親より先立つ不幸者
- ⑩ 許して下さいこの罪を……？
国へかえろか心中せよか……？

(以下不明。和泊町国頭の「紡績の歌」参照)

あんまり工場が厳しさに
部屋に帰って……

棚より……

上から下まで……

衣装ははやりの黒もよう
帯はははやりの丸結び

……拾い入れ

左に……

右に……

先立つ不幸を許してと

許してくれよと手を合わす

(飛び込もうとするところへ

向こうから船頭さんがやってきて)

もしもし姉さんどうなさる

ここで死んだら親の恥

ここで死んだら会社恥

3年間のその間

*5

親に対して不幸者

死んで花根がさすなれば

お寺やお墓は花だらけ

(船頭が連れ帰ったのではないか)

- *1 めいしょう紡績(?) 静岡工場のことか。ものすごく大きい会社で、いっぱい募集があったらしい(下久志)。井之川では静岡モスリンとも歌い、「鐘紡紡績の歌」ともいう。また、大阪では静岡を大阪と言い換えて歌った。
- *2 「いそいそと」は追い立てられるように忙しくということ。
- *3 (②—④節をさして) 本当にこんなにされたらしいな。苦しかったこと全部、歌にしている。
- *4 かわいそうだねえ、そのくらい辛かったんだね。
- *5 親が支度金や旅費を前金で受取り、3年がかりで給料から差し引く。その間は逃げるに逃げられない。一種の人身売買のようなもの。

注：この歌は、各地で最もよく聞かれる語り歌の一つ。特に歌い出しの②—④にかけて、当時の工場の過酷な実態をよく表したものとして言及される。長いストーリーの後半は急転回し、身投げへと追いつめられてゆく。当時流行った心中もの(「明石心中」などが徳之島でも歌われている)の影響がみられるかもしれない。徳之島では最後まで完全には再現できなかったが、沖永良部島で書き留められていた例を次に紹介する。この例の開始①—④の、鹿児島までの道行を歌った部分は、別個に付け加えられた可能性もある。

【参考】 和泊町国頭の「紡績の歌」 (前原広実氏・S5 のノートより)

- ① 春は花咲き夏繁り / 秋は紅葉の錦木の / 冬は一重で過ごされる
- ② 父母居ります故郷を / 久吉丸に打乗りて / 出でしは去年のキサラ月
- ③ 音に聞える七島の / 波も静けき鳴く鳥の / 声も哀れを誘うなり
- ④ 薩摩富士に開聞や / 桜島も早過ぎて / 鹿児島港に着きにけり
- ⑤ 家を出る時は笑い顔 / 汽車や汽船に身を乗せて / 大阪名所に下ろされる
- ⑥ 大阪名所に来てみれば / ぐるりは高きガラス窓 / 出るに出られぬかごの鳥
- ⑦ 朝は六時晩六時 / 十二時間のその間 / 三度の食事も急々と
- ⑧ 間違い仕事があるならば / 見廻りさんに叱られる / あんまり工場が厳しさに
- ⑨ 部屋に帰りて思案する / 短き此の世の苦勞より / 永きあの世の極楽へ
- ⑩ そうじゃそうじゃと一人言 / 人の寝過ぎし一時過ぎ / 棚のコーリを引き下ろし
- ⑪ 上から下まで衣装替え / 衣装は黒地に白の紋 / 帯は流行の丸帯で
- ⑫ そうして行くのが淀の川 / 淀の川にと着いた時 / たもとに小石を拾い入れ
- ⑬ 東に向かって手を合わせ / 西に向かって手を合わす / 親より先立つ不孝者

- ⑭ 許しておくれと手を合わす / そこを通りし仲船頭 / これこれ姉さんどうなさる
- ⑮ 此処で死んだら会社恥 / 死んでお花が咲くものか / 国に対する不孝者
- ⑯ 死んでお花が咲くなれば / お墓の小石に花が咲く / これこれ姉さんどうなさる

一。静岡めいしよの歌

♩ = ca.114

目手久

1. くーにお ぞうとき わらいが お きーしゃ きせん
 2. しずおか めいしよに きてみれ ぼ ぐりわ たかかき
 3. あーさわ うくじー ぼんうく じ しゃーにじ かん
 4. あやまち しごとが あなはーら ぼ みまわり さん

のせられ て しずおか めいしよに おろされ て
 がラスま じ ぞーるに ぞられぬ がごのと どり
 そのめい たご さんどの しゃくじも いそいそ とら
 しかられ て こんやに こーぼが きびしいは ら

備考 1. 実音は長6度低い。
 2. ♪のリズムは ♪ または ♪ に近い。

二一。「ストトン節」の替え歌1

- ① 紡績女工さんだめですよ
 いろはの一字も知らずして
 時計何時と問うたらば
 知らん顔してよそを向く ストトン *1
- ② 私ぬしさん親切に
 私が病気で寝ていたら
 ご飯食べたか食べないか
 えらい瘦せたと抱き起こす ストトン
- ③ ストトンストトンで通わせて

今更いやとはどうしたの

嫌なら嫌だと最初から

言えばストンで通わせぬ ストン *2 (以上目手久)

④ 紡績女工さんはだめですよ

一銭五厘の靴はいて

二銭眼鏡をかけたれば

君じゃ僕じゃと生意気し シューシュ *3 (上面縄 T8 男性 '93.8.20)

⑤ 紡績女工さんはだめですよ

いろはの一字も知らずして

顔におしろいべたべたと (or 紅つけて)

人よりまさるは口ばかり シューシュ *4 (目手久, 下久志, 大阪)

⑥ 紡績女工さんはだめですよ

ご飯たかせば おかゆたく

おかゆたかせば のりをたく

(のりをたかせば・・・?)

(目手久, 下久志)

*1 学校出ていないものだから、昔は、いろはの一字も知らず、都会に出ても働くことはわかったって時計もみることがわからん。それだけ惨めだったということでしょうね。

*2 子供の頃、田植の時おばあさんがよく歌っていた。紡績の歌詞に続けて、②③のような「ストン節」の恋愛歌詞を掛け歌のように次々出してあそんだ。(注：歌掛けでは歌詞の順序は固定されていない。ここでの節番号は演唱例に添って便宜的につけたものである。)

*3 募集人が眼鏡かけて靴はいてだましに来て、娘さんをつれて向こうで人身売買やりおった。だからそういう人にだまされるな、ということ。その当時はここでは革靴履く人なんかいなかった。みな藁ぞうりだから。(注：この歌は紡績帰りの人の都会風でハイカラな風俗を揶揄しているとも解釈できよう)

*4 紡績帰りは派手だといわれはしまいかと気をつかい、わざと顔をかまわなかった(下久志) / 白粉塗って顔をきれいにして帰ってくるのがうらやましくて、自分も親の反対を押し切って都会へ行った(目手久 T3?)

注：この歌も各地でよく聞かれ、紡績女工を揶揄する歌詞が多い。当時の流行り歌で調子がよく、替え歌がどんどん作られたのだろう。1は歌あそび風のものだが、次にあげる2は数え歌で語り風になっている。

二-1。ストトン節

♩ = ca.96

目手久



1. ぼせき ぼこさん だめどす よ - - いうはの いちじち
 2. わたし めしさん しんせつ に - - わたしが びんせど
 3. ストトン ストトンで がよわせ て - - いまさら いやとわ



- しらず-し る と けい なんじと とあたら ぼ
 ねていた ら じ ほん たべたか たべない か
 ど-れた の いや けら いやだと きいせか ら



- しらん があして よきおむ く スト トン
 えらい やせたと たまおこ す スト トン
 いえは ストトンで がよわせ め スト トン

備考 1. 実音は長6度低い。
 2. ♩のリズムは「♩」に近く、♩のリズムは「♩」に近い。

二-2。数え歌（「ストトン節」の替え歌2）

（春木 S4 '94.1.7）

- ① ストトン ストトン
 ねえさん紡績やめなさい
 一で肺病 二で脚気
 三でトラホの目が悪い
 四で子宮が悪くなる ストトン ストトン
- ② 五ついつまで続くやら
 六つ難しこの病
 七つ泣いても直りゃせぬ
 八つ夜業がっらくなる ストトン ストトン
- ③ 九つここで死んだなら
 十で遠い父親に

でんぼ打ったら大騒ぎ

ね(え)さん紡績やめなさい ストトン ストトン

*お金で買われてきているような状態で、帰るにも帰られんでこういう歌つくって春木で(苦勞)していたんやよ、と20才頃聞かされて憶えた。会社から出さないで束縛されて、時間労働を12時間働かされて賃金は少ない。食べ物も十分に与えない、きたない空気の中で肺病をわずらい、冷えて子宮の病をし、汚い粉塵の中で目を悪くして……女性ってなぜここまでこういう風に(下積みに)されなきゃいけないのかという思いを歌で訴えたのではないだろうか。大島だけではなく全国そういう状況。募集にきて親が年期奉公みたいな形で一言葉は悪いが一娘を売る。遊廓にいくか紡績にいくかという形で売られていった苦しさ。なるほどねえさん紡績行ったらあかんで。こういう風になって骨になって帰ってこなあかんでと。そういうことを作って歌い込んでいるのだろう。

大和村今里出身で紡績体験はないが、夫の実家が寺田紡績の社宅に住む人たち相手に商売しており、よくその話を聞いた。工場の裏門が近く、煉瓦の塀がものすごく高い。月に2回しか休みはない。女工さん達は長時間の仕事から帰るとお腹がすいて、外出できないので紐の先に紙に注文を書いて放る。店の人が取りに行き、品物を揃えて縛る。紐をひっぱって合図すると向こうへ手繰り寄せて取ったという。

三。「草津節」の替え歌で

(目手久)

① 春木紡績二十五の糸は ドッコイショ

つなぎやすいがコリャ切れやすいよ チョイナチョイナ

(類似歌詞：細井 P.333)

② 私ろうそく芯から燃ゆる ドッコイショ

*1

あなたマッチで コリャ口ばかりよ チョイナチョイナ

③ ちょいと杯くるくるまわす ドッコイショ

好きなお方にコリャ二度回すよ チョイナチョイナ

④ 嫌なお方の親切よりも

好きなお方のコリャ無理が良いよ チョイナチョイナ

⑤ 送りましょうか送られましょか ドッコイショ

せめてあなたのコリャ角までもよ チョイナチョイナ

注：*1以下掛け歌風に恋愛歌を出してゆく(二-1の*2参照)。また同じ歌詞が次に示すように「小原節」の旋律にもものせて歌われる。こうした歌詞が固定しない自在なあり方は、「あそび歌」に特徴的な傾向である。

〰春木紡績二十五の糸は

つなぎやすいが オハラハー 切れやすい アヨイヨイヨイヤサ

四。曲名未詳

（目手久）

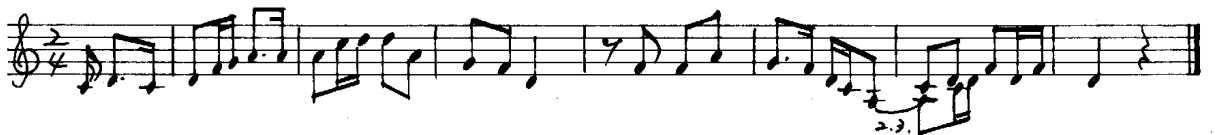
- ① こんな紡績2度と来ない
親が無いのかまま親か
- ② 親はあるけど継子じゃないよ
家が貧乏であるために
- ③ わしも行きたいあの山越えて
娘今かといわれたい
- ④ 娘今かといわれた時は
うれし涙が先にたつ
- ⑤ うれし涙を茶碗にいれて
親に酒だと飲ませたい
- ⑥ 親は酒なら飲みたいけれど
まさか涙は飲まれない
- ⑦ 一時二時頃木の葉も眠る
わしの居眠り無理はない
- ⑧ わしの居眠りぎのん（疑問？）が起こる
起こるぎのんは眠たかろ
- ⑨ わしのやんちゃん事務所に知らず
明日はかい（怠？解？）業の札がくる

注：曲名未詳。あまり知られていない。『女工哀史』に④の前半と同じ歌詞がみられる。[細井：1954：336]

四．曲名不詳

目手久

♩=102



1. こんなほ--せき にど-オと こない	おやが ないの-か まま お-や か
2. おやわ ある-けどまま-こじか ないよ	いえが ぶんほ-ど -あるに-めに
3. わしも ゆき-たいあの-やま こえて	むすめ いまが-と -いわれ-たい

備考 1. 実音は長6度低い。
2. ♪のリズムは「♪」に近い。

五。「製糸工場のうた」or「製糸情話」(目手久, 井之川 M44 男性 '85.8.22)

- ① 一年は三百六十と五日
長い月日のその間
辛抱しました製糸場で
早く女房にしておくれ
- ② きのうちも今日もおとといも
あなたの帰りを待つけれど
音するものは製糸場の
まわるシャフトの音ばかり
- ③ 辛抱せよ辛抱せよ辛抱せよ
長らく工場におきはせぬ
ことし1年来春は
天下晴れての僕の妻
- ④ しかしながらもねえあなた
親が許した人を捨て
あなたと添う気はあるけれど
親が添わさには是非もない
- ⑤ 親が添わさには添わぬ気か
親と未来は添やあしまい
これほど愛するこの僕を
親とみかえて下さいね
- ⑥ 大事な大事なふた親を
見捨ててあなたと添うからは
義理という字をいつまでも
忘れず見捨てて下さるな
- ⑦ 真実あなたが添う気なら
僕の心は海原の
千尋の海よりまだ深い
なんで見捨ててよいものか
- ⑧ わたしゃどんなにうれしかろ
僕も本当にうれしいよ
お腹に宿りしみどりごを

- 育ててかあちゃんと言われたい
- ⑨ 生まれしその子が男なら
男の子なら海軍で
女の子なら看護婦へ
どちらができて国のため
- ⑩ 桜花には惚れるなよ
色はきれいが散れやすい
恋をするならあの松に
吹かれて落ちてても二人づれ

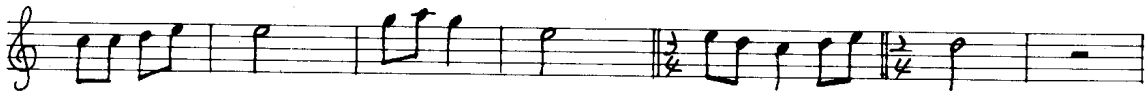
五。製糸工場のうた

♩ = 96~102

目手久



1. いち せん わ さんびゃ -く- うく じぶんに ら
2. きの お ち ぶら - - -あ- おと - とい も
3. しんぼ せ よ しんぼせ -よ- しんぼ - せ よ
4. しか し はがら -も- は - - あは た
5. おや が そわさ -にや- そわぬ -き か



あ - が - い つきひ の その - あい た
あはた - の がえり お まつ - けれ ど
はがら - く こ - ぼ に おき - わせ ぬ
お - や - が やうし た ひし - おす て
お - や - と みらい わ そや - しま い



し - こ ぼ しまし - た - せいし - ぼ ぞ
おとす な む - の - わ - せいし - ぼ の
こ - と し いらね - - こ りいは - る わ
あはた と そうき - わ - あるけ - れ ど
これぼ ど あいす - ら - このぼ - く お



は - や く には - ぼ - に - して - かく れ
ま - わ ら シャフト - の - おと - ぼか り
こ - ん か ほれて - の - ぼく の - つ まい
お - や が そわさ - にや - ぜびも - な い
お - や と みかえ - こ - ち - - だい ぬ

備考 実音は1オクターブ低い。

注：代表的な語り歌の一つで、一。と同じく各地で聞かれる。(3)に述べるユタの神歌としても使われている。②から⑦までは男女の問答，⑧は男女一緒の歌。井之川の演唱は⑧で終わる。演唄者によれば大正期に神戸で流行っており，歌の本を買って憶えた。シマに帰って聞かせると，皆が本から書きとって習ったという。

六。紡績数え歌

下久志

♩ = ca.120

3. みつふと

1. ひとつとせ せ ひとの しつたか おおさ-か の
 2. ふたつとせ せ ふた おや わかれま きたか-ら わ
 3. みつとせ せ みつさん わたしの ふりお-み て

さんねん たにぬヒ-かえられぬ さんねん たにぬヒ-かえられぬ

ところわ ぼたがき-はるきぬ-
 さんねん たにぬヒ-かえられぬ
 あわれは ぼたがき-みておく-れ

- 備考 1. 実音は1オクターブと長2度低い。
 2. 下段ヴァリエーションは演唱者の創作。

六。「紡績数え歌」or「春木の紡績のうた」

- 一つとせ 人の知ったる大阪の 所は名高き春木町
 二つとせ ふた親別れてきたからは 三年たたとと帰られぬ
 三つとせ 皆さん私のふりを見て 哀れな女工さんとみておくれ
 四つとせ 夜は九時半にねかされて 朝は3時半に起こされる
 五つとせ いつも見回り回り来て 糸を切らさず勉強せよ
 六つとせ 向こうに見えるは停車場 乗りて行きたい我が故郷
 七つとせ 長い廊下は血の涙 こうしてするのも親のため

八つとせ 山中育ちの私でも 会社の女工飯食べられる
 九つとせ ここで私が死んだなら さぞやふた親嘆くだろう
 十とせ とうとう3年たちました 皆さんさよなら帰ります

*紡績で寂しい時、みなで歌った。年配の人が歌うのを聞いて憶えた。元の歌だとあっさりしすぎて、悲しい気持ちをのせきれないので、自分で勝手にふしも作り変え、最後の文句を二度繰り返すようにした（楽譜参照）。色々あったよ、紡績の歌が。昔みな苦勞すると色々歌作った。働きながら自分の哀れさを自分自分で考えては歌にした。

注：旋律は『女工哀史』に収録されている数え歌の譜例にやや近い（他にはここでの報告例と類似のものはない）。歌詞は独自のもの〔細井：1954：415〕。第3句を反復するという工夫は、島歌の複雑な反復形式を持つ奄美の人ならではの発想かもしれない。

(2) 八月踊り風の集落全員の踊り歌として—伊仙町上面縄の「ションマイカ節」

富山の「越中おわら節」のハヤシ旋律をつかって男女掛け合い、輪になってテンポを早め八月踊り風に踊る。T10年頃、大阪から帰ってきた紡績女工がシマに持ち帰り、振付けて流行らせたという。工場内で盆踊りがあり、女工達が出身地の踊りを教えあった際に習ったものらしい。

- ① ションマイカナ ションマイカナ おはらのションマイカナ
 おはらの十八番 今出てやって来たヨ キタサノサ アードッコイショ
 踊りの番じゃが これから始めましょ キタサノサ アードッコイショ
- ② 三千世界を 二度三度まわれど
 目につくお方は ただ主（ぬし）一人よ キタサノサ アードッコイショ
- ③ 三千世界の 松の木枯れても
 主さんと二人の 縁の道切れない キタサノサ アードッコイショ
- ④ あなたと私は 電信柱よ
 離れておれども 心はいっしょだよ キタサノサ アードッコイショ
- ⑤ 電信電話で 話ができるに
 わずかの二三丁が 何でままならない キタサノサ アードッコイショ
- ⑥ ままにならぬは 浮世のならいよ
 浮世のならいと あきらめられようか キタサノサ アードッコイショ
- ⑦ 可愛がっておくれよ 見捨てちゃいやだよ

- 可愛がってくれなきゃ わがままならない キタサノサ アードッコイショ
- ⑧ くよくよくよくよ 川ばた柳よ
川ばた柳に 二人はもたれる キタサノサ アードッコイショ
- [本調子] 竹に雀は 品よく止まる とめてとまらぬ おはら節
キタサノサ アードッコイショ
- ⑨ 19や20才(はたち)で 死んだらどんなにする
可愛いあの身は 火葬場の灰となる キタサノサ アードッコイショ
- ⑩ のんきで暮らせよ わずかの五十年よ
五十年といえども 今日やら明日やら キタサノサ アードッコイショ
- ⑪ 貴方と添いたさに 三年このかた
山奥住いで 炭焼き苦勞する キタサノサ アードッコイショ
- ⑪ 今日食って 明日食う飯がなくても
貴方と添わなきゃ 鉄道が枕よ キタサノサ アードッコイショ
- ⑫ 鉄道が枕で 汽車来りゃそのまま
汽車来りゃそのまま 冥土の旅だよ キタサノサ アードッコイショ
- ⑬ 越中は田の中 信州は山の中
東京はまん中 住みよい所よ キタサノサ アードッコイショ
- [本調子] タコに骨なし ナマコに身なし わたしゃ子供で 色気無し
キタサノサ アードッコイショ
- ⑭ 浮いたかひょうたん 軽そうに流れる
行く先知らねど あの身となりたい キタサノサ アードッコイショ
- ⑮ 大阪新下りに 蛇の目のから傘
主さんにささせて わしゃちょいと眺める
眺めた姿が 目についてならない キタサノサ アードッコイショ
- ⑯ 南蛮鉄のような 豪傑男でも
女にかけたら 青菜に塩だよ キタサノサ アードッコイショ
- ⑰ お前さんその声 何処から求めた (何処で歌を習ったか)
出雲の温泉 洋食店で求めた キタサノサ アードッコイショ
- ⑱ お茶屋の看板に 梅屋と書いてある
梅屋を見かけてウグイスとまるよ
ウグイス見かけてオハラ来てとまる キタサノサ アードッコイショ
- ⑲ どっこいしょと飲んだ酒 まだ酔いさめない

- さめないはずだよ あなたのお酌だもの キタサノサ アードッコイショ
- ⑩ 二合と三合は 何処でも五合だよ
二合と三合は 五合榊いらぬ キタサノサ アードッコイショ
- ⑪ ションマイカイナ ションマイカイナ 一服ションマイカイナ
一服してから 後からまたションマイカイナ
キタサノサ アードッコイショ

*T 期に紡績女工が神戸大阪へどんどん出ていった。伝えたのは M42 生の栄ナベ姉（アカ）で、15 才で大阪に出てエレベーターガールもしていたという美人。19 才で島に帰り、歌を教えて振付けた。本調子はひきながめてもったいぶっているが、ハヤシは早くて振付けやすい。ションマイカというかけ声が景気がよくて好まれ、これは元のおわら節にはなく、シマで作られたのではないかという。

本土の踊りだというので珍しがられ、きれいに化粧して衣装もそろえ、舞子さんのようだった。全島から行事や祝いに招かれ、上面縄名物として評判になった。S2 年御大札の祝いに出たのをよく覚えている。戦後も盛んに踊られ、今は当時ほどの熱気はないが、八月十五夜では最後に立ち踊り（八月踊りのこと）の後踊られる。他に「福島節」も教えたがこちらはすたれた。

中には女工達のことを歌った歌詞もある（注：上述の⑩や次にあげたものか）。これらの歌詞は、女工達が工場の中で一生懸命考えて作ったのではないかと思われる。

●故郷出るとき ふた親様に 金を送ると言ってきたが

ハイカラ男に目がふれて 二か年の満期は 丸裸（「福島節」）

注：⑩（始め）と⑪（終わり）を全員で斉唱するが、他の節は男女で一行ずつ掛け合うのが奄美風である。歌詞は固定され即興性はないが、所作なども奄美の八月踊り様式に仕立てられている点が興味深い。参考までにもとの「越中おわら節」の譜の一例をあげておく。なおションマイカのカケ声は⑪の歌詞に由来するものと思われる。

おわら節

三絃本調子 ♩ = 76

越中國婦負郡八尾町

唄

三絃

〔うたわれよー わしはやす〕 き た (ア) る (ウ) は る ー か ー ー
 も し (イ) や (ア) く る ー か ー ー

せ (エ) (エ) ー こ を (オ) り わ ー と (オ) け ー て [エ ドッコイサノ
 と (オ) (オ) ー ま ど (オ) お ー し ー あ (ア) け ー て

サ ー コレワイサノ リッサ] ろ れ し ー や (ア) (ア) ー き ま ー (ア) ま ー に ー [オ
 み れ ば ー ア (ア) (ア) ー た て ー (エ) や ー ま ー

ワ ラ] ひ (イ) ら ー く ー (ウ) ー ろ め
 ゆ (ウ) き ー ば ー (ア) ー か り [さん ぜん せか いの

【囃し】

まつ の きゃ ー か れ て も お ま え さ ん と そ わ な き ゃ し は え て た ー か い が な い

【實際ノ音高】
 うたわれよー etc.

(3) 奄美社会の深層へ—ユタの神歌として

ここでは'85年に大島笠利町佐仁で行われたマブリワシ（死後四十九日までに行う口寄せ）で、〈紡績歌〉が神歌として使われた事例を紹介する。収録テープは小川学夫氏の提供によるもので、私自身は立ち会っていない。全体の経過は山下'86に詳しい。

マブリ（霊）ワシ（分かっ）とは、元来死者の魂を呼び、死者に話をさせ、これがすむと生きた魂と分けてあの世に還すことで、「死者のクチを語る事」を意味する [山下：1977：150]。ユタを通して存分に語らせ、思いを残さずあの世へゆかせることが主眼である。死者が眼前に現れたごとく遺族はその言葉に涙し、時にはその席で遺言や相続の指示までなされる。

山下によれば、奄美のユタの呪詞は一般には祈願詞（唱え）と叙事的歌謡の2種の形をとって表れる。儀礼の経過は表1（原文では表2）のようで、6区分に分けられる。その中心の「死者の思いを語る」部分の導入に、(1)の五。「製糸情話」の旋律が歌われるのである（表1⑬の「数え唄みたいなうた」がそれにあたる）。これは死者の霊が降り始める重要な箇所、以後頂点の⑯⑰から⑳の神送りに至るまで、死者の思いは、波が重なり高調してゆくような朗唱調の旋律で歌われる（ただし⑮⑱は島歌）。歌詞はすべてこの状況に即した即興のもの。共通語は本土の歌である⑬のみで、他はシマグチが主である。⑬の歌詞の概要は以下のとおり。（聞き取りは酒井による。不明な箇所もある）

- ① 一年は360と5日 / 長い月日のこの間
 / よくぞここまで来ましたが / とうとうわが世はないけれど
- ② あとに残るはわが子への / 歌と始まり歌で終わり
 / 終わるわが身のいとおしさに / 千人から万人も思われて
- ③ 本当は有難の言葉さえ / 掛けてこの世のお別れを
 / するがわが身のあり方と / 思うてましたけどこのかなわずに
- ④ 心のあり方と口数と / 合わさらず残念で残念でと
 / 幾晩も幾晩も苦しみて / とうとうわが世は亡くなりました
- ⑤ これから兄弟ともどもに / 一つを頭（かしら）に揃え出して
 / いいわけをさとさすとおっしゃり / 念仏に面目はないけれど
- ⑥ 許して下さい仏様 / 宗教の違いはあるけれども

表1 「マブリワシ」の経過一覧(1985.9.22 奄美大島笠利町佐仁)〔山下:1986:83〕

	時間	経過		時間	経過	
(1) 準備	① 4:30	墓参り・供物の準備	⑳	10:55	ススキをふりながら、うたいはじめる	
	② 9:10	ユタを迎えに行きユタ到着	㉑	10:59	ススキをふるのを止め、うたを止めて考える、頭をかしげる、ススキをはげしくふる	
	③ 9:25	未亡人と盃をかわす 塩で祓い、供物の点検	㉒	11:00	シマウタ・ユイスラ節をうたう。ハイハイアリガトウゴザイマス	
	④ 9:30	白衣, 白足袋, はかまをはく	㉓	11:02	ススキを両手でにぎりうたいはじめる, 妻への感謝をうたう	
	⑤ 9:32	呪詞 (つぶやくように)	㉔	11:08	列席の人々へススキを左手ににぎって語りかける	
(2) 死霊を呼ぶ	⑥ 9:34	鉦を打ちならし手を打つ	㉕	11:15	ススキを下して死霊たちが話しているのがみえるという	(4) 説明
	⑦ 9:38	娘が仏だんに線香をたてる	㉖	11:26	↑ ススキをおき, 高膳の前にむかい次に列席者の方へむくのをくりかえしながら, 死者の口を説明する ①戸主のこと ②相続のこと ③金銭のこと ④子どもたちのこと ⑤紋つき羽織の始末のこと ⑥妻のこと ⑦祖先を拜むものこと	
	⑧ 9:39	酒を盃にそそぎ, ハイハイといいはじめる	㉗	11:38		
	⑨ 9:42	祝詞 (標準語) をあげる	㉘	11:40		
	⑩ 9:45 9:55	呪詞をとこなえ, 両手を合してハイハイ未亡人に語りかける, 首をふりながらシマウタ(民謡), アサバナ節をうたう	㉙	11:45		
	⑪ 9:58	ハイハイと手を打ち, シマウタ・ティダヌウティマグレをうたう, 手がふるえ始める	㉚	12:07		
	⑫ 10:00	シマウタの中に死者の口がでてくる	㉛	12:25		
	⑬ 10:03	盛んに手をうちながら数え唄みたい <u>なうた</u> をうたう (死者の口)	㉜	12:33		
	⑭ 10:10	(娘, 親類のもの泣き始める)	㉝	12:45	列席のものからの質問をうける ①死んだ時のこと ②財産のことなど ユタはおなじように答える	
	(3) 死霊の思いを語る	⑮ 10:13	シマウマ・クルダンド節をうたい神のクチを下に教え下さいとうたう	㉞	13:05	
⑯ 10:17		手をひざにして上体をゆらして呪詞をうたう, ススキを手にする	㉟	13:10	両手合し, 両手を上げたりしながら, なごりをおしんで死者がかえるとうたう	(6) 祓い
⑰ 10:26		ススキをにぎりながらうたう。 うたが激してくる, 両手でススキをにぎる	㊱	13:20	左づなをなう 供物をみんなで少しづつ食べる	
⑱ 10:47		娘や親類に死者が呼びかける。 うたにでてきたのを説明し, またうたう。	㊲	13:35	供物, ススキなどを包み, 海岸へユタを先頭にでかけ, ユタが海へむかい呪詞をとこなえ, 供のものが後にむき逆手で供物を海へ投げふりむかないで家に帰る	
⑲ 10:53		ハイハイミカタンサマ, 別の死霊がみられるという	㊳	13:50		

- ／親と子との心とて／義には合わないこのとおり
- ⑦ ちしぶきをあげたるいかりづな／親の無い身のいとおしさに
／我が親の玄関にて立ちふさがりて／前もってこの家に恩かけて
- ⑧ 一口恩知らずと言いたいけれど／口には出さぬこのつらさを
／とうとう我が親とは離れても／兄弟はばらばらに離れるなよ
- ⑨ 兄弟のうちちは前にまいて／他人は外に曲がるものよ
／身内は親よりな先まがり／他人は外に広げるものど
- ⑩ よく聞けよ聞けよ聞きなさいよ／これは我が子（くわ）のあり方に
／残念と怒りを取り出して／面目はありませんすみません
- ⑪ 今日から本人はこの家うちには／うしろを背向きにしたけれども
／あすの朝からはケロとして／何事もなかったごと顔をして
- ⑫ おうちに上がるその時は／そ知らぬ顔して迎えなさい
／子供は人にはしらされず／中身のあり方はどうであろうとも
- ⑬ 我が二人なしゃるこの子でも／親は可愛さは皆同じとて
／シマが違うちと思うて／どうかこの子まで大事に

開始①の前半のみ元来の歌詞で始まるが、すぐ独自の歌詞となる。子供への思いを断ち切れず死なねばならなかった心残りの思いが激しい調子でたたみかけるように吐露され、兄弟力を併せてと諭す。内田によれば、通常霊を降ろす箇所では叙事歌の「流れ歌」が歌われるが〔内田：1983：239〕、ここではやはり語りの要素をもつ〈紡績歌〉で代用されている。ひたすら耐えた紡績体験にこめられた怨念ともいえる思いが、共通の基盤となってこうした歌を導き出しているのだろうか。ユタは1941（S16）年生まれで、直接の体験はなくともシマで歌い継がれてきた紡績歌とそれにまつわる紡績体験を受け継いでいると思われるのである。

3. 紡績体験をめぐって

〈紡績歌〉は、本土への紡績の出稼ぎ体験抜きには考えられない。では、戦前いったい何人の人が奄美から本土に向かったのか、また就労の実態は、といったことになると全貌は明かではない。統計的な資料は皆無に等しく、少な

くとも徳之島、大島の職安や町役場、大島支庁などには資料は残されていない。わずかに人口動態の中に他府県への転出、という項目があるが、これとても、紡績のような婚前の一時期の出稼ぎには有効ではないだろう。ここでは、様々な年代の方々からお聞きした紡績体験を報告し、若干のまとめと補足をしていきたい。

(1) Aさん (M31生) '88.9.24 伊仙町目手久にて

名瀬に紬を習いに行ったとき、募集人から「紡績とってお金の儲る所があるから行こう」と誘われた。大阪にいる知人を募集人も知っている、というのでその人たちの所へ連れて行って貰う約束で、出て来た。

紡績では寄宿舍に入った。働きに働かされ、鼻血が出た。止まらないので紡績の綿をつめてトイレへ行った。もうここで自分は死ぬんじゃないか、と思い「こんな仕事は辛くてきつくてできないから、やめさせてくれ」と言ったら、「鼻血くらいで死にはせん」と言われ、首筋を強くつかまれたら鼻血が止まった。

6尺のハタに3人でつくが、仕事を憶えれば2人です。一生懸命働いても、賃金はちょっぴりでハナクソ程度。給料を貰うと、門鑑（外出券）を貰って、島から出てきている知人の所などへ遊びに行った。知人の母親は募集人をしており、娘3人は紡績で働いていた。

寄宿舍からは、外出を利用して逃げる人が絶えなかった。身一つで、こうりや着物は持ち出せない。ヤマト（本土）の人は賢いから、私達にも門鑑を貰うように頼む。私達は外出するふりをして、荷物を少しずつ分けて持ち出してやった。最後には空こうりまで、一つも残さず持って行った。そんなにして何十人も出してやった。島の人はそのような知恵もなく、みんな捨てて身一つで逃げる。逃げようとして、塀の釘の出ている所に引っ掛け、着物も破れ大怪我した人もいる。逃げようとしたら交番で捕まって叩かれ、連れ戻されて工場で袋たたきに合う。逃げようと思えば殺されるの覚悟だ。

半年後に島に帰ってきた。なかなか出してくれないので、おばさんが死んだのを、お母さんが死んだと嘘をついて、やっと一週間暇をもらった。島に帰っ

たら両親が「もう絶対大阪には行かさん」と言って出さなかった。

(2) Bさん (M38生) '93.9.27 目手久にて

8人兄弟の5番目。18—25才まで、小松川の東京モスリンに行った。

家族が多くて父に借金があり、砂糖キビで支払う。刈り取っている所へ催促の人が、今年は何丁ぐらい払えるかと言っているのを見るとかわいそうで、姉さんは4才年上で大きすぎて行かれず、私一人が行った。左弁の人が募集人をしており、亀津の人と2人一緒だった。はじめ日清紡績に募集されたが満員だったので東京にまわされた。行く時、25銭前借りした。募集人は返さなくていいとまで言ったのに、向こうへ行ったら借金が50銭になっていた。兄が「妹を売りものにした」と募集人と喧嘩し、私は絶対この会社に入らないと言い張ったが、「あんた一人だけ納得せんから困っている。助けてくれ」と主任に泣きつかれ、仕方なく入った。後に50銭の借金も返し、田舎にだいぶ仕送りもした。

モスリンでは羊の毛を糸にして織っていた。白い綿毛を被ることもなかった。会社の中で礼儀作法や裁縫を教えており、田舎では肌襦袢も縫えなかったが、裁縫に打ち込んで仕立物をして儲けるまでになった。休みの日は門限が厳しく、映画をちょっとみるくらい。ある時友達と映画をみに行ったら。男の人が自分のところへ行こうと誘ったのでついて行ったらぞうりを隠され恐くて、会社まで夢中で裸足で走って逃げてきたこともあった。

寮は7人部屋。島の方は亀津の人が1人いただけで、言葉で苦勞した。何を言っているかわかるが自分から話せない。はじめは言葉ができずにばかにされたが、後に部屋長までした。いじめられることはなかった。東京はガラが悪くなく、まあまあだった。

貧乏な家から出て行ったから、とにかく頑張った。高い塀を越えて逃げる人もいた(落ちてかたわになる人も)。しかし貧乏して親がかわいそうだと思う人は辛抱する。勤務は12時間で、歌のとおりだ(2の一参照)。機械をまかされるのでご飯を食べるのもそこそこに掃除にかかる。一生懸命働いて2年半で見回り(監督)になった。そんなに早く見回りになったのは私だけだった。仕事

一点ばり。見回りになると厳しい。一人の台でも悪くなったら世話せにゃならんし。

T12（1923）年東京大震災にあった。寝巻きのまま墨田川の川端に避難して三晩寝た。監督さんは自分の家族を捨ててまで誘導してくれた。朝鮮人虐殺があり、外には恐くて出られなかった。ずっと燃えどおしで、今ごろ私たちの着物が燃えてるなあと思いながら見ていた。交通費免除で故郷にみな帰ったが、私は、来た限りはこのまま帰るまい、と留まった。21日間、小さいものを一日にただ二つ食べてしのいだ時の苦しさは忘れられない。他の会社では餓死する人もいた。姉は名瀬の港でずーっと帰りを待ってたそうだ。

年ごろになったから帰れ帰れといわれ、仕方なく帰った。男なら帰らなかったと思う。化粧、ハイカラは全然しなかった。奥歯を東京で抜いた所に入れ歯を入れたかったけど、人に笑われんかなと思ってそれもしなかった。「外へ出た人はゾレ（遊女）だ」と指さされるのではないかと、着物も地味にした。「紡績帰りは男を持った」「アサムチ（浮気、遊び女）」といわれる人もいた。大阪へ行く人は多かったが、東京へは目手久では私一人ぐらいだろう。貧乏人の子は尋常小学校を卒業したらすぐにも家の手伝いで、募集されたから行かれたが、他には本土へ出る手段はない。

(3) Cさん（M40生） '92.8.22 目手久にて

紡績には明治生まれは沢山いった。都会へのあこがれもあった。人によっては裁縫、礼儀作法、お茶、生け花など習う人もいた。映画ばかりみて遊ぶ人もいた。そういう人は墮落してしまいにはカフェーや遊廓へ。度胸のある人だ。

(4) Dさん（T3生） '94.1.8 大阪にて

S4年に13才の年祝いを島（瀬戸内町）でしてから、岸和田紡績本社工場へ。尋常小学校の6年間は義務教育。おじが募集人をしており、卒業予定の子を予約して歩いていた。卒業と同時に岸和田の紡績へいくもんやと覚悟していた。旅費を前借りし、3年の間差し引く。その間は帰れなかった。

河内方言は言い方がきつく、「わいなー（私は）……」と頭から叱られて

いるみたいだった。「いちゃっちょーえ (いってらっしゃい)」「きちっちょ (きなさい)」と見回りから言われてもポカンとしていたら、「おまえら琉球人やろ」といわれた。差別があった。朝鮮人は寮が別で、奄美の人は集まっていた。所帯もっていた同郷の人もいた。

13才といったらこづかい貰って遊ぶ年頃。何もわからんあんな頃に昔の人は皆親から離れて働きに出て、寮に入って。一部屋12人ずつおったよ。慣れたおねえさん方は日曜になったら映画みにとか行きよった。私らは子供やから映画も何もわからん。外出したらまた金使うから行ったらいかんというような、子供のケチやねんな。働いて金送って親助けにゃいかんちゅうことよ。映画ばっか見るのは不良やぐらいに思っている、あの時代は。洗濯のたらいにお姉さん方は自分の洗濯をつけて置いておる。姉さん方が「洗濯しておいてくれんか」といったら「よっしゃ」いうぐらいや、子供やから。冬になったら上はガラスを張ったみたいにガラガラしおって、お姉さんが行ったあと、その中に手をつっこんで洗濯もん私はさせられたりしよった。手は紫みたいにしもやけしていた。昔は沢山雪が降った。瓦の上から氷が落ちてくる。ガラスの降ったような雪が堅くなって大きな岩みたいになって落ちてくる。

湿り気を帯びた気候だと不思議に糸がよう切れる。糸というのは切れたらつながらん間は綿ぼこりになっているから、綿で花が咲いてるみたいになっている。それがもう大変で。肺病の人が多かった。病気になって帰る人は帰る。病気の人に旅費を貸してそのまま捨てたこともある。いなかに帰したけどそのまま亡くなった。

16才 (S7頃) の時労働基準法がはやった。8時間勤務になるといって、夜11時に仕事が終わるのはいいが、おなかがすいてたまらない。隣にうどんやがあった。風呂敷に5錢包んで2尺のものさしにくくって窓へやる。うどんの玉を包んでまたもってくる。それに醤油をかけて食べた。外出は門衛がいて門鑑を貰うが、なかなか買物にも出られない。

S19年、空襲がひどくなり親の面倒を見るため田舎に引き上げた。

妻が和歌山の倉敷紡績へ。西阿木名から2人だけいった。一年もたたないうちに辛抱しきれず夜逃げした。夜も蚊が多くて眠られない。夜中に駅はこちらの方だろうと見当をつけて、真っ暗な田圃の中を一晩中歩いた。大阪の叔母さんをたよって、岸和田紡績へ就職した。岸和田紡績はよかった。S7, 8—10年頃までいた。当時大阪へは1週間から10日、鹿児島までは3日かかって行った。

(6) Fさん (T12) '93.8.17 下久志にて

S15年頃母間の募集人に連れられて大阪の紡績へ。面接の時職場を見学したら、綿ぼこりが一杯舞っている。「ハイー、こんな所で働けないわ。いないと言ってくれ」と逃げた。東洋製カンに。すぐ会社がつぶれ、皆で仕事探し。ゴム会社もつぶれ、別の紡績に。そこも、募集人をしていた親戚の人が兄のふりをして「兵隊に行くので母の面倒を見させる」と嘘をついて連れ出しに来た。一緒に居たえらぶの2人も見送ると嘘をついて、身一つで逃げ出した。東洋航空の軍需工場で作る飛行機を作り、工場の外に部屋を借りてみなで住んだ。結婚すると嘘をついてやめ、S19年島に帰った。

当時手がたりず、島の人が募集人をしていて沢山の人が行った。春木工場、静岡紡績、枚方紡績などへ就職。沖縄、えらぶ、鹿児島、伊仙の人が多かった。紡績工場ではよく女工が逃げるので、外出には厳しかった。一人が門鑑をもらって着のみ着のままで出て待つ。もう一人が風呂敷包みを投げると外で待っていて受け取るという風にして逃げた。

自分は出入り自由の賄いの人と親しく、夜も遊びに連れて行ってもらったりした。

(7) Gさん (S2生) '93.9.20 上面縄にて

S14年、尋常小学校卒業後青年学校へ入ってすぐの頃に本土へ。同級で行ったのは自分一人。母の連れ子で祖母の家に預けられ、育ての親に気を使い、迷惑をかけたくないという気持ちが強かった。ある日道を歩いていたら「ヤマトへ行きたい人いないかね」と伊仙の募集人が言ってきた。すぐに「私がい

と返事。義父からは「いくな」といわれたが、「私が決めたことだからいく」といった。沖に泊まっている船を見たい、と頼んで連れて行ってもらい、そのまま船に乗り込み戻らなかった。水汲みの手伝いをして貯めてあった20銭とちり紙、スカート、上着、夏冬の着物を一着ずつ風呂敷に包んで持って行った。

母の兄が大阪にいた。募集人は、その人を知っているから連れていくという約束だったが、だまされて紡績に放り込まれた。西淀川区の富士紡紐工場へ。寮は鹿児島、沖縄、埼玉など各地の人が混じっており、1部屋6人。はじめ1週間くらいは食事もとらずに押入で泣いていた。部屋長^{へやちょう}さんが「出てご飯なんか食べんといかんよ。そんなに押入の中に入らたらいかんよ出ておいで」といった。よけい涙が出た。その人が戸をあけて、「一緒に行こう」といい食事をした。まわりは知らない人ばかり。小さくて可愛いからおちょくられからかわれているのを、いじめてると思って泣いた。言葉は学校で共通語を習っていたのですぐ慣れた。半年いて、会社がつぶれたため転勤させられ、4—50人の人と一緒に四国の愛媛の川之江紡績へ移った。徳之島の人も4人いた。

工場内では、勤務の合間に珠算、舞踊、裁縫、読み書きの科目を習った。盆踊りなどもした。外出は門限もらってゆくが2—3時間。日曜日は必ず休みで映画も見た。外出が思うようにできず、親に便りを出しても返事がこない時などは悲しかった。しかし仕事を終えての学校が楽しく、つらさを忘れるため舞踊に打ち込んだ。病気する人も多かったが、私は、かかるときはかかる、心配してもしょうがない、と別に気にかけなかった。

工場内で祖母が亡くなった知らせを受け取ったが帰れなかった。肺病で亡くなった人を火葬場に送ったこともある。伊仙の人が10人くらいおり、同郷の人が亡くなった時、誰も身内がないからつきそってくれと頼まれて、穴からマッチで火をつけた。

終戦後、琉球・奄美大島の引き揚げは今度で最後だよといわれ、S20年島へ帰った。

[まとめ] 以上、境遇は様々だが、募集人、前金、寄宿舍、就労、逃亡、楽しみなど共通の話題が語られている。紡績の実態はT14年に世に出た『女工

哀史』に詳しい。僅かずつ改善はあったものの、日本資本主義の興隆期の犠牲となり、苛酷な労働条件と、心身の拘束に苦しめられたことはよく知られているとおりである。しかし虐待・病苦・差別など負の側面と並んで、ここではハイカラな都会（モダニズム）への憧れ、借金苦・飢餓からの解放という肯定的な側面も語られている。電気、水道などの便利さ、ともかくも米のご飯が食べられることなどもあり、都会の魅力は想像の中で大きく膨らんだ。ヤマトへの旅費を工面するのは募集によらなければ不可能だった。

*19才で結婚が早かったので行きたかったが行けなかった。父が絶対許さなかった。

*親がいなくて家を守らねばならず、ゆかれなかった。行く人をみたらうらやましくてたまらなかった。残る人は、辛いということがわからないから、皆が都会に出たらうらやましくてもう逃げて行きたいくらいだった。初めて都会へ出てハイヒールの靴をはいてる人をみると、どこの職員かねと思ってずーっとあとつけて歩いたりした。

*パーマをかけている人を見ると、パーマネントに火がついた、と悪口歌をうたってからかった。

*親は反対だったが、皆が面白がって行くもんだから「私も行く行く」と言って、喧嘩して出てきた。

しかし来てみると憧れと現実の落差は大きい。

*憧れていたときは、都会の家は障子やふすまやらきれいな家と思って行ったわけよ。なにシマの家よりも悪い、もう南京虫は一杯いるし、エーこんな家に住んどるかなと思って。こんなところよりシマの方がいいわ、と思った。

かくて紡績体験には、それをどう受け止めたかという側面で、かなり屈折したものをよみとらざるをえない。総じて島で暮らす人は、長い年月の間に辛苦は穏やかなものに変えられ、余裕と距離をもって語られるが、大阪で暮らす人には、昨日のことのよう生々しい語り口が感じられるのである。

最後に、しばしば話に出てくる募集人と、春木紡績について若干の補足をしておきたい。

(8) 募集人

体験談では、募集人にだまされたという話があとをたたない。また自分の親戚が募集人をしていて、小学校卒業予定の子を予約して歩いたという「青田刈

り」の例もある。当時は島中至るところ、「募集人」の網がはり巡らされていた印象を受ける。

『女工哀史』によれば、女工募集方法の変遷は次の3期に分けて考えられるという。

●第1期：M10—M27，8年の日清戦争頃まで・・・無募集時代

工場数が少なく、農村には働き手があり余り、募集は殆ど術策を必要としなかった。女工の拘束も必要なく、自由意志により応募，退職できた。

●第2期：M37，8年（日露戦争）頃まで・・・自由競争時代

工場数の増加と、工場の劣悪な実態が知れ渡ったことにより、募集難となる。そこで女工の束縛，文通制限等が行われる。具体的には「年期制度」「身代金制度」等。また工場内での習い事，低年齢化にみあった尋常小学校の設置，「強制送金制度」等により親にアピール。一方では各会社に募集人が置かれるようになり，募集業務が重要なものとなる。しかし女工の争奪が起きるくらい人手不足が深刻となる。

●第3期：現在（T末）に至る・・・募集地保全時代

「市内募集」では女工を誘拐する力づくの方法が横行する。一方「地方募集」では、略奪的手段をあらため、募集の組織化，永続化が図られる。方法は以下の2通り；

〔直接募集—社員自ら募集地へ出張し，直接募集にあたる。〕

〔嘱託募集—募集人に任せ，会社は女工一人幾ばくで買い取る。〕

さらに地方の募集人の活動を工場管理人が監督したり，出張募集の場合は地元の村長や警察などの有力者を抱き込む。生まれた赤児まで予約する，というようなことまで行われたという。また，縁故募集のほか，活動写真や芝居，ポスター等イメージ広告を使い，甘言を並べ立てて募集を行うようになる。工場の実態は改善されず，拘束的な制度はそのままに，募集方法は組織的で手のこんだものになっているのを見ることが出来る。

*募集人といって直接本土から斡旋にくる人を，地元の人が仲立ちする。本土では言葉も地理もわからない。だまして別の会社に売り込み，手数料を丸儲けし，一種の人身売買をする悪い人もいた。大正から昭和初期までよくあった。（上面縄）

こうした話は，この第3期を反映したものといえるだろう。

(9) ハルキ紡績とは；現地調査報告

*父（M27 生）が募集人をしていた。その前は税関に務めていた。その折りに紡績工場の人と知り合ったのではないか。岸和田のハルキ紡績と契約し、ヤマトゥン（大和の）アジャ（父）と呼ばれて本土と往復していた。このあたりからも沢山行った。（目手久）

歌にしばしば出てくるハルキ紡績とはどんな所だろうか。奄美の人達の就労の記録はないだろうか、と春木を訪ねてみた。最寄りの駅は南海電鉄春木駅。S3年に、北帰守（きたかもり）村を改め大阪府泉南郡春木町となり、S17年岸和田市に合併された地域である。泉州工業地帯の中心部で、当時、複数の紡績会社の工場が林立していたが、春木紡績という名の会社は存在しなかった。春木にある紡績を一括してハルキ紡績と呼んでいたと思われ、現在それらの工場は残されていない。ここに大正、昭和初期の春木周辺の様子をかいつまんで紹介する。資料は岸和田市史編さん室より頂いたものである。

一。『郷土春木』より

（手書きの尋常小学校向け郷土教育指導教本。S6, 7年頃の編さんと思われる）

春木町一帯は、もと半農半漁の寒村であった。春木海岸では地曳網漁が盛んで、他府県からも漁師が集まり、にしん、いわしなどをとっていた。M中期頃より松林、砂浜の海岸沿いに工場が次々と設立され、海運を利用した一大工業地帯になる（地図1）。主な沿革等；

M20 岸和田煉瓦綿業（株）綿業部設立

T1 岸和田紡績春木分工場……………S5 現在 男工 332, 女工 1145 計 1473 人

T2 和泉紡績（株）……………S5 現在 男工 244, 女工 1007 計 1251 人

T9 東洋帆布（株）創設。以後大小個人経営工場も続々と興隆し、工場数 45 を越える商工業地域となる。（地図1）

S16 岸和田紡績が大日本紡績に合併され、翌年操業停止。海員養成所になる。

この間人口は増え続け（表2）、特色としては女子及び他府県からの来住者が多いことがあげられる。一般に農村では女子、工業地帯では男子人口が上回る

傾向があるが、ここでは逆で、女工が多いためだろうと説明されている。来住者は朝鮮満州、沖縄、九州、北海道をはじめ殆ど全国にわたり、総人口の約6割を占める。1年間の移出人員平均20人に対し、移入は10倍の283人に及ぶとい、全国から労働人口を吸収し続けたさまを裏付けている。「春木町では毎年人口が増加する。春木町の人口増加は工場発展の印である」と礼賛されている。

その他の関連記事としては；

●春木町の工場で鳴る号笛の時刻；

和泉紡績，岸和田紡績：午前4，6時 午後1，2，4，11時

東洋帆布工場：午前4，5，6時半，午後2，3，5時半，7，11時

●原料の綿花輸入先：アメリカ合衆国，インド

製品の綿糸綿織物輸出先：アメリカ合衆国その他各国

輸出入港：主として神戸港，大阪港

●労働賃金表：工場 部長 1円45銭（日給）

社員 25—120円（月給）

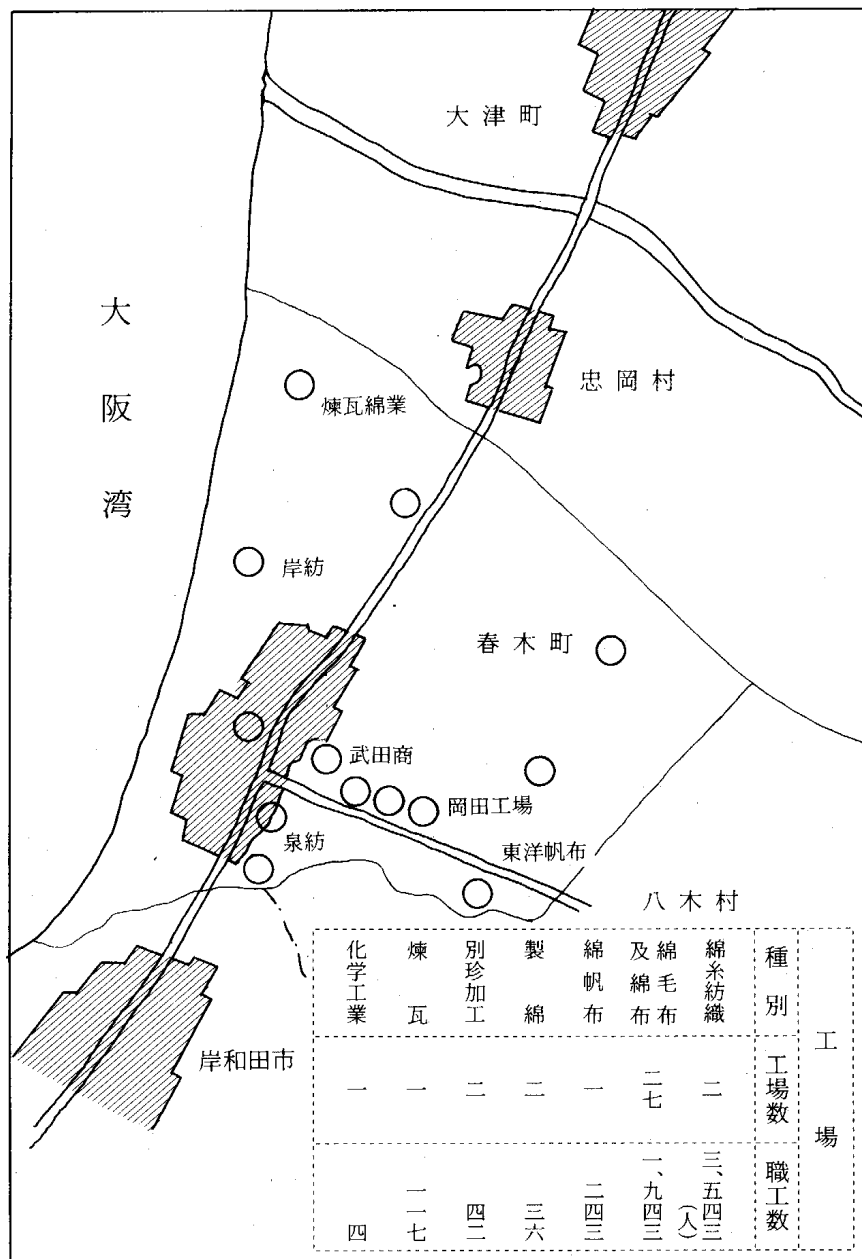
職工 男工 1円25銭（日給）

女工 70銭—1円20銭（日給）

参考 大工 1円60銭—2円40銭（日給）

表2

●春木町の人口				
	男	女	計	戸数
S4	5511	8028	13539	2470
S13	7918	10805	18723	—
(泉南郡 15万人 岸和田市 3.5万人)				
●本籍人口と入寄留者の割合 (S4)				
本籍人口		入寄留者		計
男	女	男	女	
2500	2582	3011	5446	13539
●出入人口 (S6)				
他出者		入寄留者		
男	女	男	女	
253	203	2818	5341	
		(1878)	(4225)	他府県



地図1 春木町工場分布（職工数 30人以上）『郷土春木』より

二。私立泉南郡教育会（編）『童話伝説俚諺俗謡集』（M42刊行）より

泉南郡の口頭伝承を収集したものである。その中の「俗謡一雑の部」に「煉瓦紡績等の職工社会に於けるもの」という項がある。七七七五調の、男女の情交をほのめかした歌詞他 19 首が集めてあるが、奄美の〈紡績歌〉とはまったく異なる。

「職工社会に於いてもこのようなものばかりではなく、一般流行歌も歌っている。しかし他の社会に於いてはあまりこのようなひわいな歌を常に歌う人は

少ないが、職工社会に於いては、ことに女工に於いては、工場がよいの途中、その他、人の前をもはばかりず、大声に歌うものが少なくない」との附記がなされている。(資料1)

三。T10年 岸和田市街図より

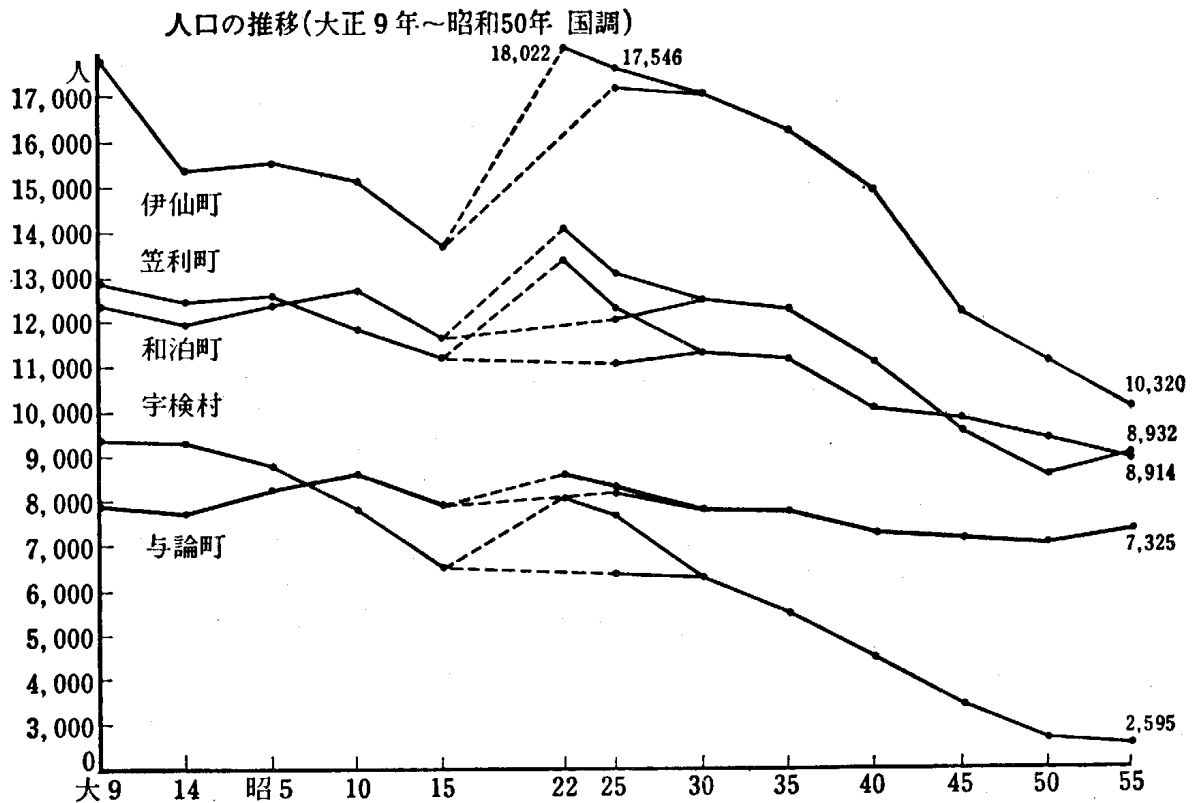
海岸沿いに泉州織物紡績部、岸和田紡績本社工場・野村工場、窯業煉瓦会社、大阪窯業(株)岸和田工場、岸和田煉瓦(株)本社工場などが並ぶ。さらに北の春木・忠岡にかけて、東洋紡績、寺田紡績などが連なる地域である。駅から海岸の岸和田紡績本社工場に至る駅前通りは、六つの銀行が集中し、商店、映画館などが並ぶ泉北・泉南地区随一の街であった。休みの日は買物、映画見物の女工さん達があふれ、駅前通りは一杯になったという。当時は給料をもらうと遠い道のりも歩いて行ったものだという。

4. 時代的背景と出稼ぎ、関西郷友会(ごうゆうかい)の形成

奄美を含む南西諸島は、伝統的な人口流出地域であったとされる。²⁾「奄美の各町村島々では戦前においては、宇検村を代表とするような移民の多いところであった。また、与論島の場合村をあげて北九州の炭坑へ出稼ぎに出ているし、あるいは関西との航路が開けて以来、移住者や出稼ぎ者が集中して、『大島町』と呼ばれるほどに奄美諸島出身者の多い地区が関西に形成された」ような形態の移動である[鶴飼：1981：100]。紡績・出稼ぎ体験もこうした脈絡の中でみておく必要がある。ここでは紡績女工の時代的背景と、関西におけるコミュニティーの形成という現在につながる問題について、参考資料をあげておきたい。

(1) T9年以降の深刻な不況と人口流出

奄美の人口動態は、日本本土との関係に大きく左右される。国勢調査が始まったT9年以降の人口の推移(図1)をみると、二つの極端な変動に気づく。T9年以降の急激な人口流出と、S22年をピークとする人口の増加である。前者は深刻な大不況という経済的要因、後者は敗戦による引き揚げとアメ



注：昭和25年の国調が行われなかったため、30年国調結果に記されている組替人口と琉球列島調査(昭和25年12月1日)とを並列して示した。前者の方が数値が低い。

本島南部の宇検村は、昭和5年までは、一島一町である与論島よりも人口が多かったのであるが、特に戦後の本土高度経済成長期に入った後の急減率は驚きに値する。人口規模はやや大きい徳之島の伊仙町も若干類似した急激カーブを描く。大島本島北部笠利町は比較的なだらかな減少カーブであり、沖永良部島の和泊町と比して変動が少ない。ここにも人口面からみた南北問題が現われている[若林：1981：61]。

図1

リカ統治による本土との分離、という政治的要因が大きいと説明されている。そしてS28年の日本復帰以後は一貫して減少傾向にある。

T9年以降の流出が最も激しかった伊仙町は、〈紡績歌〉がよく聞かれる地域でもある。18,274人あった人口が、T14年までの5年間に2906人減り（徳之島全域では7000人）、以後も減少傾向は止まらない。この頃の状況を『伊仙町誌』にみてみよう（一部略）。

- （日清・日露の）戦争景気はT9年を頂点として反動期に入り、不景気風は全国をゆすぶった。砂糖も大島紬も下落した。大島紬は一反30円まであがったのが、9年には14円と下がり、さらには9円台に下がり、紬工場も倒産が続出した。こうして零細農民は小作地を返上しわずかばかりの自作地や宅

地を手放して、本土への転出者がふえた。

- T9年の支庁統計書によると、伊仙村の人口18,168人のうち阪神方面へ男女747人、台湾へ27人、外国へ8人、その他本土各地へ38人、計820人の人々が転出しており、その後も毎年900人前後の人たちが、船便ごとに転出している。
- T12年の関東大震災は、不景気に拍車をかけた。14年頃から景気も除々に回復したが、島では一般商品は不景気時代の物価のままで一向下がらず、暮らしは苦しく都会への転出者は続出して、昭和時代を迎えるのである。
- S4年から始まった世界経済恐慌の波及で、奄美諸島も経済的に窮乏におちいり、住民の生活は「蘇鉄地獄」と新聞雑誌に書かれるほど苦しい生活に追い込まれるに至った。S6年には「なべ底景気」と呼ばれ最悪となった。
- 多数が阪神や京浜の工業地帯へ出稼ぎに行ったが、受け入れ企業が少ないため特殊な技術者以外は人手があまり、失業群が激増していった。職業紹介所の門に殺到する失業者群は新聞、雑誌をにぎわした。特に四国の阿波地方と奄美からの女子失業者群は多く、転々と飲食店やカフェ、バーに住み込み、転落するものが多かった。関西奄美会はこういう奄美くずれ（転落者）を防止して、専業につかしめようとする人々が集まって指導に乗り出したのであった。景気的发展につれて、奄美会的发展と指導で次第に解消していった。
- 当時の人口流出状態を見ると、S10年の伊仙村本籍人口24,123人のうち出稼ぎ者は京阪神へ3896人（大阪2690、京都685、兵庫521）、福岡へ119人、愛知へ72人、その他35人、合計4253人で増加の一途をたどっていた。一方S6年満州事変を契機に満蒙開拓が始まったので満州、台湾、あるいは第一次大戦でドイツから接収した南洋諸島に進出して、戦後引き上げてきた人々が全島で約400余人いる。
- S7年に始まった農山村漁村の自力厚生運動等により土木事業などが施行され、S8年には「蘇鉄地獄」も解消した。いくらか生活を軌道にのせつつあった時、S12年、不幸な支那事変が起こったのである。支那事変は長期化してそのまま第二次大戦へと移行し、戦時下の生活に入った。

(2) 関西におけるコミュニティー、郷友会（ごうゆうかい）の形成

以上伊仙村だけで毎年 900 人前後の転出、S10 年には本籍人口 24123 人のうち 4000 人の出稼ぎ者を数えるという状態である。転出者は年々増え、大半は関西に向かっている。受け入れる関西側では各地に奄美出身者のコミュニティーや親睦・互助組織（＝郷友会）が形成されてゆく。

一。郷友会の発足

大阪の中でも歴史が古いとされる秋徳郷友会の場合をみてみよう [関西秋徳郷友会：1983]。瀬戸内町秋徳集落は人口流出が伊仙町と並んで激しい大島南部の加計呂麻島にある。大阪での居住の中心は此花区高見で、通称「奄美村」といわれ、現在も 50 世帯以上の奄美出身者が住むといわれる地域である。記録では、居住の最初は M22 生の男性で、T 元年に警官として赴任したという。この人を頼って次々と移り住み、T12 年頃までには家族も呼び寄せ 30 数名を数えるまでになった。淀川河口のデルタ工業地帯にあり、働き口には不足しなかった。そして T13 年正月に郷友会を発足させ、以後 70 年余の歴史を持つという。

沖縄県人の出稼ぎも T5—6 年頃からといい [平良：1971：21]、T7—8 頃的好況にのって「大阪行けば何とかなる」あるいは「大阪に出て一儲けしよう」という思いは共通のものだったようである。尼崎、泉大津、忠岡、東淀川区など各地に、集落ごとの拠点があり、最初そこの世話役を頼って泊めてもらい、なるべく早く働き口をみつけて独立してゆくのである。

*大阪にきたら楽できると思ったら大間違い。「とにかく祭りも休みも何もないなあ」と。12 時間労働以外に、奉公人だったから前後も準備や掃除に働かされ、寝るのは 11 時すぎ、朝の 5 時にはもう起きる。

*大正期、16 才で島を出る。神戸の製鉄所で鉄板加工。石炭ガスに混じる灰を吸って肺をやられた。暑い職場でよほど丈夫でないと耐えられない。朝鮮や奄美の人が多かった。当時は「奄美の言葉を使うな」と先輩にもきつく言われた。シマウタが慰めで、こっそり雨戸をたてて三味線を弾いた。

以上のような状況の中で、集落単位での自然発生的な互助・親睦のつどいが大阪、神戸、泉州方面等各地域ごとにもたれ、休日や盆正月などに寄り集まって

いた。好況でも不況でもヤマトへ出て来ざるをえないのである。健康を損ね、島に戻って直るとまた来る、というような往復運動を可能にするのも、こうした寄り処あってのことだろう。またシマで聞かれるヤマトグチ（本土の言葉）が関西アクセントであるのも、その絆の強さをあらわすものであろう。

二。復帰運動と郷友会の組織化

郷友会を自然発生的な互助組織から連合的な運動体へと質的に変化させたのは、第二次大戦による奄美分離をきっかけとした祖国復帰運動が大きい。米軍統治下におかれたこの時期、本土との行き来は禁止され、島は引き揚げ者であふれた。集落単位の郷友会は互いに連絡をとりあい、奄美連盟をつくり、復帰要求を掲げるとともに、引き揚げや物資の援助、密航者の救出等の実務的な支援を行った。こうした経験をもとにS28年の復帰後に、関西各地の組織の連合体として様々なレベルでの郷友会が結成され、その活動を競い合っている状況である（資料2）。

今日関西在住奄美出身者は2世、3世も含めると約40万人といわれる。全奄美の人口14万人をはるかに越える規模である。その現状や課題等、詳しい分析は今後の研究にまきたい。ただ言えることは、もはやノスタルジーのみの時代ではない、ということである。「本籍も墓も親兄弟もこちらで、もはや島へ帰るということはありません。ただ、八月踊りなどみるとその雰囲気は何ともいえなくなつかしい。帰ろうかなということではなくて、行ってみたい、ということはある」という。シマに戻るつもりはないということ、ヤマトの中でコミュニティを作って住むということの意味を深めてゆくべきだろう。シマグチ、シマウタ、シマオドリに象徴される独自性を指標に、奄美出身者としての連携を保持しつつ、京阪神でいかに根を張って生きてゆくか、また島に対していかに影響力を行使してゆくかという現実の社会関係を考える時代になってきている。エスニシティの多様さを内抱する関西は、そうしたダイナミックなあり方にふさわしい環境といえるかもしれない。いま、奄美はシマとヤマトの両輪で成り立っている。郷友会研究は、これからの課題といえる。

5. おわりに

紡績体験は、出稼ぎの中でも特異な位相をもつものだろう。明治から大正へ、殖産興業の国策のもと、工業社会へと音をたてて変わってゆく特殊な時代状況があったことはいうまでもない。通常の出稼ぎとは異なり、それは結婚前の一時期に限られ、いずれ帰ってシマ社会の構成員として子供を生み育ててゆくことを前提としている。若い娘達の身体や命を借りての、シマ社会を維持するぎりぎりの選択だったのかもしれない。多感な時期に飢えと拘束に苦しみ、たまに外出してみる都会は、刺激的な珍しい物にみち溢れていた。若い娘たちは「籠の鳥」の嘆きを歌に託さねばならなかったのだろう。

その歌は持ち帰られ、シマでの歌あそびのジャンルの中に吸収された。そのありようは、奄美の歌文化の特質の一端を示すものである。短い歌詞で掛け合う掛け歌と、長くストーリーを順序だてて歌ってゆく叙事歌の両方で完結する歌の世界がここにも表れている。従来のレパートリーでいえば前者は三味線付きの島歌に、後者は沖縄からの口説などに対応するものである。「物言いの半分は歌です」といい、歌を生きる活力として互いにつながりを深める奄美人のあり方は、ヤマトでもおおいに発揮されたといえよう。

[付記]

本稿は、平成4—5年度文部省科学研究費補助金（総合研究A—研究代表者 横浜国立大学 笠原政治）による「沖縄からみた異文化としての日本—本土体験の調査研究」の研究成果報告書より転載したものである。現地調査は'92年8月—9月及び'93年の8月—9月（以上奄美）、'93年1月及び'94年1月（以上関西）に合計約45日間実施した。

なお、この調査にあたり、特にお世話になりました下記の方々をはじめ、快くご教示下さった多くの方々に心より感謝申し上げます。

池田登志子、時 富彦、武島福明、平野福也、池田信秋、岸和田市史編さん室の各氏。

注(1) 採譜の方法は『日本民謡大観（沖縄・奄美）』の凡例に添ったものである。（日本放送出版協会、1989～1993）

注(2) 戦前から奄美の過剰人口問題は、海外集団移民、国内集団移住、あるいは出稼

ぎという形で多くの対策がみられる。与論島では、明治31年8月の台風による大飢饉を契機に長崎県に13~30歳の240人（途中各島の応募者をのせて700人）の移民団を翌32年2月におくり、42年には三池港の開港に伴い港湾労働者となったという記録もある（興洲奥都城会『三池移住50年の歩み』昭和41年8月）。宇検村でも南米への移民が比較的ひんばんにみられたし、昭和期に入ってから満洲分村などもその地域集团的移住の一形態である。また出稼ぎは古くから多数みられる〔若林：1981：61〕。

〔文献〕

- 細井和喜蔵 1954『女工哀史』岩波文庫
 平良 盛吉 1971『関西沖縄開発史—第二郷土をひらく』沖縄文化協会
 山下 欣一 1977『奄美のシャーマニズム』弘文堂
 ——— 1986「奄美のユタのクチ」川田順造（編）『口頭伝承の比較研究(3)』弘文堂
 若林 敬子 1981「人口の変化」松原治郎他（編）『奄美農村の構造と変動』お茶の水書房
 鶴飼 照喜 1981「就業構造と労働力移動」『同上』
 金 賛汀 1982『朝鮮人女工のうた—1930年・岸和田紡績争議』岩波新書
 内田るり子 1983『奄美民謡とその周辺』雄山閣
 仲地 哲夫 1985「戦前の徳之島における出稼ぎ及び糸満系漁民の生活史」（講演資料）
 町誌編さん委 1978『伊仙町誌』町役場
 関西秋徳郷友会（編）1983『創立60周年記念誌』
 村誌編集委（編）1987『宜野座村誌 vol.2 資料編1：移民・開墾・戦争体験』村役場
 関西手々郷友会 1990『関西手々郷友会会員名簿—創立25周年記念号』
 神戸奄美会 1990『創立60周年記念誌 奄美』
 日本放送協会（編）1992（初版1955）『日本民謡大観中部編（北陸地方）』日本放送出版協会

資料1

蒸

俗

(1)

煉瓦紡績等の職工社會に於けるもの

- 三号二階から、豆の皮はれば、リング雀が、拾ふて食ふ。
- 惚れてやつまらん、総場の検査(検査員)ととめ(認印)ばかりで、じつ(實印)は無い。
- ばいのさねぎと、豉豆の花と、いとことしかや、よう似たる。
- 夜の夜中に穴掘る虫は、頭ちやびんで、目はひとつ。
- おめこするのを、横から見たら、齒抜や寒酢、かぶるよな。
- ちさい、へのこで、干するよりも、おまな、へのこで、いき戻り。
- お山買ふなら、桃買て食やれ、桃にや毛もある、核もある。
- おかんちとんこして、わしこしらへて、わたしや、ちよんこすりや、いけんする。
- おめこさすけど、毛だ々まてな、毛は又おめこの、どいつとんび。
- おめこさすけど、さねだけつまんでな、さねや又小便の糞をとる。
- 赤いゆ巻は、平家のはたよ、中にさね盛、陣屋とる。
- 一夜なんとは、お易いけきと、大根畑に、名はのこる。
- おまり寝かさに、ハイカラさんと、ねたら、元祿まがへの子ができた。
- おまりねたさに、郵便屋さんとねたら、しよえく走りの子が出きた。
- おめこの中には、材木屋はおさる、お金もて茶にやきをやらん。
- 赤いゆまきに、迷はぬものは、木佛、金郎、石ばどけ。
- 酒さばくちと、おやまとなたりや、親に勘當は受けやせぬ。
- ひとりふたりは、めんどくさいといな、せめて、五人のこのなけりや。
- 姉はさすなら、妹もさしやれ、同じ蛇の目からかさ

資料2 郷友会の設立年度（前身～組織の発足）

関西亀徳会（T13～S5）

+ 関西瀬戸内会（T14～S24）

関西亀津会（T15）

+ 阪神喜界町郷友会（S2）

+ 神戸奄美会（S6～S26）

近畿兼久会（S16～S23）

+ 関西奄美会（S30）

+ 近畿笠利会（S36）

関西手々郷友会（S39）

+ は集落の連合組織。（資料提供：池田信秋氏，角島直門氏ほか）